『六百番歌合』判詞と『源氏物語』

――古注と現代語訳――

小髙道子

藤原俊成が『六百番歌合』[1]の判詞（以下「俊成判詞」と略す）で「源氏見ざる歌よみは遺恨の事なり」と記したことにより、『源氏物語』が歌人にとって必読書であったことが喧伝されている。しかしながら、「源氏見ざる歌よみは遺恨の事なり」とするのは、俊成判詞の一部に過ぎない。細川幽斎が『耳底記』で語っている通り、中世の歌学者にとって歌合の判詞を検討することは極めて重要なことであった。そのため『岷江入楚』にみられる解釈は、当時の歌壇において行われていた解釈と推定される。だが、現代の『源氏物語』研究において、『岷江入楚』をはじめとする古注で行われた解釈が検証されることは少ないようである。本稿では花宴巻の解釈の相違に着目して、両者を比較してみたい。

一　程なく明ゆく

源氏が朧月夜と一夜を過ごした夜が明ける時のことを『源氏物語』は「程なく明ゆく」と記している。この部分の注に『岷江入楚』は「春のみしかよのふけたるさま思ふへし」と春の夜は短夜であることを指摘している。花宴巻に描かれているのは春の花の季節である。歌人としては秋の夜長に対して春の夜は短いことをまず想像するであろう。

それに対して小学館の『日本古典文学全集』（以下、『全集』と略す）は、「官能の時間が一瞬のうちに過ぎ去る」と注を付す。そこで着目されているのは、春という季節ではなく、源氏と朧月夜との「官能の時間」である。「官能の時間」であれば、仮に秋の夜であったとしても「一瞬のうちに過ぎ去る」のであろうか。

二　花宴の巻はことにえんなる物なり

ここで想起されるのが、俊成判詞の「えん」という語である。俊成判詞には「えん」という語が「なににのこさんくさのはらといへる、えんにこそ侍るめれ」「そのうへ花宴の巻はことにえんなる物なり」と二度出てくる。そして後者の後に「源氏見ざる歌よみは遺恨の事なり」と続く。俊成の「源氏見ざる歌よみは遺恨の事なり」という判詞は、「くさのはら」という語が『源氏物語』「花宴」の場面を連想させることに気付かずに、「くさのはらききよからず」と難じた「右方」を「右方人草の原難申之条、尤うたたある事にや」と批判した後で記されている。この判詞について伊井春樹氏は「俊成の想念には光源氏と朧月夜による情趣的な場面が展開して感興を催した」として、次のごとく記された。(4)

俊成は「草の原」のことばの背後に花宴巻を連想し、艶なる内容として受容している。つまり俊成の想念には光源氏と朧月夜による情趣的な場面が展開して感興を催したのであり、それ故に良経の歌は優美なる姿を持っていると高く評価されるにいたったのである。そうすると俊成のようにこの歌を味わおうとすると、源氏物語の美的情趣を持たなければおよそ鑑賞できないことになる。

俊成は「草の原」の「ことばの背後に花宴巻を連想し、艶なる内容として受容し」たのであろうか。また俊成が「花宴の巻はことにえんなる物なり」と記したのは「俊成の想念に」「光源氏と朧月夜による情趣的な場面が展開して感興を催した」からであり、「俊成のようにこの歌を味わおうとすると、源氏物語の美的情趣を持たなければおよそ鑑賞できないことになる」のであろうか。

「源氏見ざる歌よみは遺恨の事なり」と記した俊成は、二条流の歌学者にとって、その言説が判断の基準になる重要な歌学者であった。一方、歌合について細川幽斎は、「歌合ほど重宝なるものはあらじ古人の批判を直ちにきく心なり。歌合といふ歌合にわが見ぬはなきなり。大かた見たるなり。」と烏丸光広に語っている（『耳底記』慶長三年九月九日）。歌合は「古人の批判」を知る事が出来る、歌学を学ぶ上で重要な資料であるが、「よき判者のをみる」のが「習」であり、「千五百番」歌合は偏頗なところがあるので「六百番」歌合が良いと幽斎は言う。幽斎から古今伝受を受けた歌学者でもある通勝は、『岷江入楚』に「故人此物語称美事」として「俊成卿六百番歌合判詞におよそ源氏の物語をみさらむ哥よみは無下のことなりと云々」と記す。これらの記述から、幽斎や通勝は『六百番歌合』の判詞を重視して、歌学の視点から『源氏物語』を学んでいたことがわかる。すると、俊成が言う「花宴の巻はことにえんなる物なり」の「えん」は、「光源氏と朧月夜による情趣的な場面」というよりはむしろ、歌学用語の「えん」だったのではないだろうか。「情趣的な場面」を指すのではなく歌学用語の「えん」であるなら、俊成判詞の「紫式部歌よみの程よりも物かく筆は殊勝なり」という「殊勝なり」の語と通じる。

二条流の歌学者にとって、俊成のことばは、歌学を学ぶための重要な規範であった。歌学者は、より良い和歌を詠むために『源氏物語』を学んだ。そのため、『岷江入楚』をはじめとする古注の解釈は、歌学者の視点による解釈として参照される必要があるであろう。

三　外の散りなむとやをしへられたりけん

朧月夜の和歌に限らず花宴巻には、『岷江入楚』が高く評価する和歌が多いが、和歌ではない本文についても高く評価した項目が見られる。

花　古今哥に外の散りなん後そさかましとよめるは花にいひをしへたる心なれは哥の詞になき事をも心をとりてかくのことくかける也　定家卿の哥はおほくは此物語より出たりとみえ侍り　いこま山いさむる花にみる雲のうきて思ひのたゆる日もなし　とよめるは本哥の雲なかくしそといへるは雲をいさめたる心なれはやかて心をとりていさむる花とよみ侍る也　こゝの詞に相似たるやうなれはよりもつかぬ事なれと筆の次に申侍る也　大かた源氏なとを一見するは哥なとによまむ為也　よまむにとりては本哥本説を用へきやうをしらすしてはいかゝと思ひ給へ侍れはいときなき人の為にしるしつけ侍る也

この「外の散りなむとやをしへられたりけん」という表現は、『古今和歌集』の「見る人もなき山里の桜花ほかの散りなむのちぞ咲かまし」をもとにしたものであるが、この和歌には「をしへ」という言葉はない。教えるという言葉は用いていないが、「花にいひをしへたる心」であるので、「哥の詞になき事をも心をとりてかくのことくかける」という。そしてこのように、本歌とする和歌にはない言葉を、和歌の意味を用いて詠むことの例として定家の「いこま山いさむるみねにゐる雲のうきて思ひはきゆる日もなし」（『拾遺愚草』二〇四六）を挙げる。この歌の本歌となった『伊勢物語』二十三段の和歌「君があたり見つつを居らむ生駒山雲なかくしそ雨は降るとも」（『新古今和歌集』一三六九）には「いさむる」という言葉はないが、「雲なかくしそ」というのは「雲をいさめ」た「心」であるので、「いさむる花」と詠んだというのである。そして、定家の和歌の多くは「此物語」すなわち源氏物語「より」出たという。『源氏物語』などを一見するのは歌などに詠むためで有り、詠むためには本歌本説の用い方を知らなければならないので、書き付けたと『花鳥余情』は記している。そしてこの様な歌の取り方は、「外のちりなん」と記したこの『源氏物語』の本文を「手本」としていると、「花」「箋」が記していることを『岷江入楚』は指摘している。[3]

こうした本歌の心を重視した古注の解釈に対して『全集』は「宮中の花の宴の盛儀の後で、私宴に世の貴紳を集め豪遊と企てる右大臣家の権勢意識がこめられる」と注を付している。本文に引用された和歌に対する注釈の相違が明らかである。

四　いとうれしき物から

巻末の「いとうれしき物から」について『岷江入楚』は「ことうれしき物から」として次の注を付す。

花　草の原をはとはしとや思ふといひし其人の声とは聞きなせりうれしきものからの結語おもしろく書なせり　かつ〳〵うれしくはあれともいまた六の君とはたしかにしらぬ心をふくませたり

箋曰　花に草の原の君そと凡は聞なしたれとも六君にや又もし別人にやたしかに知給はぬ心云々　花説さも有ぬへし　此結語誠に物語の眼也　源氏の心にあくかれて有明の行衛を尋知たき心なれは此時其人とたしかに知ぬるは本意のうへの本望也　されとも女の身にて人にこそよれかろ〳〵しき事やと心に浅く思給よし也源氏の性万事においてかくのことし　眼を付へし

秘　花鳥説面白し　但師説此結語は返哥をし給事はうれしくはあれとも女の身にとりてはちとかろ〳〵しとおほしたる也　是源氏の姓也　いつくにも此心あり

弄尋あひたるはうれしけれとも女の返事すへき事のさまは然へからすと思ひ給心あれは物からといひのこしたり　是又源の性也

花鳥の説も其故あるにや　五六の間未分明云々　此外心あり　いつれも面白歟　此時のさまうれしけれとも猶あちきなく物思ひなるへき古今伝受路をこめて物からといへるにや云々　感あるにや

聞書にはうれしき物からかろ〳〵しきと也

箋聞には五六君未分明事云々

さて箋聞にも青表紙の義退而思ふ時はかろ〳〵しきか難なると也

師説云々

私云　うれしき物はかろ〳〵しきか正説也　花に五六分明ならぬと弄ノ義ニいよ〳〵物思ひのますと云は異説也　然ともいつれも面白しと心得へし

箋秘凡源氏物語の中にも此巻すくれたると也　六百番判にも紫式部は哥よみの程よりも物かく筆は殊勝の上花の宴の巻はことに艶なる物也云々

巻尾に記されたこの注にも、俊成判詞が引用される。『花鳥余情』をはじめとする『岷江入楚』が継承した古注は、俊成判詞を念頭に置いてこの巻を解釈しようとしたのであろう。「草の原」の和歌を詠んだ朧月夜を「天性の歌人」であると表現し、俊成判詞を念頭に置いたとみられる和歌の詠み方、本歌の取り方、和歌以外の文章の書き方についての注記が多く見られる。古注は俊成が「えん」と表現した言葉の根拠を、男女の情愛ではなく、和歌や文章の表現方法に見いだそうとしたのであろう。

それに対して『全集』は「艶」の語を用いて次のまとめを付す。

艶麗な一帖。春の朧夜、微酔の中で「夢幻的な一こまは、女をそれとつきとめて、「いとうれしきものから」と結ぶ。余韻が長く尾をひく。藤原俊成が、「源氏見ざる歌よみは遺恨のことなり」と

言ったのは、この巻の幽遠な情緒に言及したときである。

俊成判詞は「草の原」の語を用いて詠まれた和歌について記された。その内容は歌学者により検討され、『花鳥余情』などの注釈書に継承されている。俊成判詞の「えん」については、稿を改めて検討を加えたい。

注

（1）『六百番歌合』『耳底記』『岷江入楚』の引用は、新編国歌大観、日本歌学大系、源氏物語古註釈叢刊による。

（2）歌学者による『源氏物語』研究については『歌よみと源氏物語』（『中京大学文学部紀要』二〇一六年三月）で検討した。

（3）「『花鳥余情』と『岷江入楚』」「本歌取と本歌」（『中京大学国際教養学部論叢』二〇二〇年三月）。

（4）「『源氏物語注釈史の研究』（『一九八〇年　桜楓社）。